魅力ある飯豊を守るために

飯豊連峰保全についての取り組み

写真と文◉佐藤一交

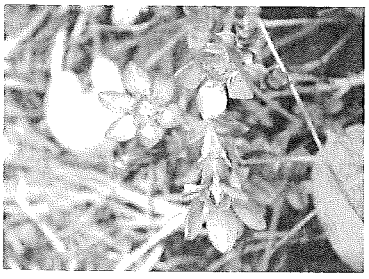
一般に登山道をはじめとする山の保全は、幅広い関係者が関わって進められてきており、従来この仕組みが有効に機能してきた。一方、行政責任の明確化を求める動きなどの社会状況の変化につれ、山の保全管理の仕組みについても変化が生じており、山への関わり方について改めて考えることが求められている。平成二十年二月、飯豊連峰（いいでれんぽう）を対象として山岳関係者、自然保護関係者、行政関係者、一般登山者による山の保全に関する連絡組織が立ち上がった。その発足経緯と今後の取り組みについて紹介したい。

飯豊の特性

飯豊連峰は、磐梯朝日国立公園の中央に位置し、山形・新潟・福島の三県に及び、飯豊山（二一一〇五㍍）を主峰、また大日岳（二一二八㍍）を最高峰とする二〇〇〇㍍級の峰々が連なる東北地方最大級の山岳地帯である。地形地質的には花崗岩を主体とした構造山地で、特に冬期の偏西風によってもたらされる多量の降雪による偏東積雪、雪食非対称山稜が見られる。また線上凹地の池塘群や周氷河地形、雪窪といった特徴的な地形がある。植生的には雪田草原や風衝草原、偽高山帯による高山植生があり、固有種としてはイイデリンドウが見られる。

飯豊山の残雪と大日岳

登山利用面の特性としては登山口によって若干の差はあるものの、標高三〇〇～四〇〇㍍付近の登山口から間もなく始まる急勾配は、標高一六〇〇～一九〇〇㍍の主稜線まで続き、その間に避難小屋はなく稜線上の避難小屋に宿泊するには食料や宿泊用具の持参が必須である。そのため、おのずと登山利用者には十分な装備と体力、経験と技術が求められる。あえて言うならば、飯豊は安易に登れる山ではない。さらに加えるならば、安易に登れる整備やサポートを期待すべき山ではない。飯豊の原生的な自然、これは簡潔に言えば山が本来もつ厳しさや険しさといった山の本質そのものであり、その飯豊らしさを守るためには登山者自身にも求められるものがあるし、また行政機関も飯豊連峰の特性を理解して取り組むことが求められるからだ。



固有種イイデリンドウ

登山道調査

この地域の登山道は、古くより信仰等で自然発生的に付けられた道をはじめ国有林の巡視道などが登山道として利用されてきており、地域の関係者がその管理にあたってきた。しかし近年、地域の関係者から登山利用に起因すると見られる登山道の侵食や周辺植生への影響の拡大について懸念する声があり、東北地方環境事務所では、山岳関係者、自然保護関係者、行政関係者、学識経験者等による検討を開始した。検討は、関係者一同で山のあり方への意見や現地の情報提供をはじめとした広範な意見を得るための意見交換会、さらに基本方針や整備手法といった個別検討項目についてのワーキンググループ、また具体的な手法検討のための現地での実証試験が行われた。

荒廃にさらされる「天狗ノ庭」

実証試験で検討を行った荒廃事例について例示してみたい。

次ページ右の写真は「天狗ノ庭」と呼ばれるかつてテント幕営された跡地である。一九八〇年代まで利用されていたようだが、現在はテント幕営地とは記されていない。場所は飯豊山から縦走ルートを西に進み御西岳から北へ進んだ主稜線上にあり、その主稜線の東斜面上部の線上凹地となっている雪田草原内である。状況としては幕営跡地が裸地化し、さらに上部登山道周辺でも裸地化が見られる。荒廃の原因としては幕営時のテント周囲の溝切りによるものと、上部登山道のガリー侵食による土砂流出と考えられた。人為によって荒廃したその個所では植生回復の兆しは見られず、荒廃規模の深刻さから関係者によって、登山道は平成六年頃に植生的に安定している主稜線のササ帯に付け替えられた。

登山道の付け替えにより荒廃の拡大は止まったが植生の回復はわずかであった。天狗ノ庭の荒廃は登山活動の影響そのものであり、それは傷跡であり、多くの関係者の「何とかしたい」との共通の思いが伝わり、関係者の協力したいとの意向を取り入れた手法が検討されることとなった。そして地域の山岳団体関係者によるホームページ、口コミなどによって実証試験の計画は多くの方が目にすることとなった。

実証試験の手法としては、植生復元と土留めを行った。対象面積としては約四〇〇平方㍍、資材としては植生ネット一二巻（幅一・二㍍×三〇㍍）、土のう袋七〇袋、番線のほか、使用機材としては剣スコップ、ツルハシ、金槌、ワイヤーカッター、ビニール袋等。まず、使用した資材や機材は東北地方環境事務所からの調査業務を受託したコンサルタント会社で用意したが、現地までの荷上げは地元の山岳団体をはじめ地域の関係者による多大な協力があった。必要とする資材量を作業前日に手分けして運び上げる想定であったが、中には当日までに重さ一八㌔もある植生ネットを自発的に数回にわたり運んでいただいた方々もいた。

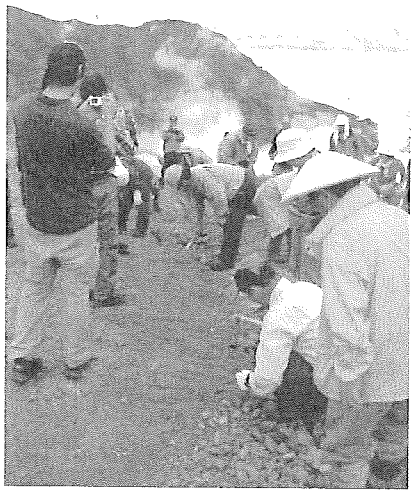
またそのようにして運び上げられた資材に加え、より現地に馴染む植生回復を促すべく周辺植生からの種子採取を計画した。これは植生ネットのみによる逸出種子の飛来を待つよりも確実に発芽が見込めるとのことで、巻機山での植生復元の事例を参考にした。結実期に合わせて採取を行う必要があり、磐梯朝日国立公園の特別保護地区であること、また国有林野であることから、双方それぞれの植物採取の許可を得て、ヒロハノコメススキやヒゲノガリヤスといった周囲に広く分布しているイネ科やカヤツリグサ科の数種類の種子を採取した。

以下の手法はやや具体的になるが紹介したい。

植生ネットを張る予定個所の転石を取り除きつつ、それら転石で侵食された溝を埋めるようにし、ある程度ならした表土上に種子を満遍なくまき、その上に麻製の緑化ネットで弛みを持たせながら覆った。さらに強風で緑化ネットが飛ばされないように、U字形に加工した番線を緑化ネットの上から地面に打ち込んで固定した。また現地を見ると裸地部でも比較的大きな石の風下側ではわずかに植生の回復が見られたことから、その微地形効果を期待するとともに重しを兼ねて緑化ネット上には石を置いた。緑化ネットの施工は弛みを持たせて使用するのがコツのようである。

当日の作業場所までは、最寄りの登山口から地図上の水平距離では一三キロ、標高差約一四〇〇メートル、また登山地図のコースタイムでは約一一時間を要す。当日早朝からの作業のため、少なくとも前日からの行程となる場所にもかかわらず、山岳関係者、行政関係者約四〇名もの参加があった。まさに天狗ノ庭の保全にかける関係者の思いの収束を見た。

会議室でのワーキンググループにおいても、飯豊連峰の自然環境を後世に引き継ぐためには人為的な影響は極力避けること、これは階段工等の画一的な土木工事を基本とするのではなく、従来関係者によって行われてきた細やかな対応を前提とした保全行為を主体とするべき、またきめ細かく対応するためには、関係者が連携分担して保全・管理を進めることが最も重要である、との認識の一致を得た。この関係者の連携こそが飯豊にとって必要と再認識されることとなり、次の基本方針が樹立された。



上・植生復元作業。緑化ネットを張る前に地表の凹凸をならしている

右・「天狗ノ庭」実証試験前の様子。写真手前は旧登山道。ガリー侵食により土壌が流出している。また奥はかつてのテント幕営跡地。現在の縦走路は写真左のササ帯の中を通過している。今回の実証試験では主に旧登山道の侵食面に植生復元作業を行った

基本方針

【Ⅰ】奥深く広大な飯豊連峰にふさわしい登山道とする。

＊自然性の高い、飯豊連峰になじむ登山道を目指す。

＊飯豊連峰の登山道は、登山者自身の判断と責任により利用するものとする。

【Ⅱ】登山道および周辺環境の保全修復を図り、人為による影響を最小限にとどめる。

＊登山利用による登山道や植生の荒廃を最小限に抑え、荒廃個所では保全修復を行う。

＊保全修復にあたっては周辺の自然環境への影響を十分に考慮する。

＊自然環境保護や遭難防止のため、標識類の修復・設置を行うなど、登山道をわかりやすくする。

【Ⅲ】山岳団体・自然保護団体等の地域団体、行政、登山者の連携を図る。

＊山岳団体・自然保護団体等の地域

団体、行政、一般の登山者が、連携・協力しやすい仕組みをつくる。

＊飯豊連峰の自然環境保全への取り組みや登山道の状況を登山利用者に周知するなど、登山道や周辺環境の荒廃につながる行動、危険な行動の抑制を促す。

連絡会の発足

保全手法を検討するための実証試験においては、地元山岳団体や一般登山者より、資材運搬や作業実施の面で積極的な協力があり、豊富な山岳経験、そしてなによりも飯豊への深い愛着に裏打ちされた献身的な取り組みにより、実証試験時のみならず、日常の登山活動の折の試験個所の推移観察、軽易な補修なども含め、多大な貢献があった。

このような経験を通じ、まさに関係者が連携して取り組むことの有効性、行政任せにするのでなく広く登山者も山の保全・管理に関わるべきという山岳関係者の共通認識の元、今後は、関係者が情報を共有し、連携分担して飯豊の保全に取り組んでいくための恒久的な仕組みを皆で設置して進めていくこととし、二年にわたる調査業務はとりまとめられた。

平成二十年二月二十三日（土）、恒久的な連携の仕組みとして飯豊連峰保全連絡会が立ち上がった。これは従来見られる行政主導による会議組織ではない。山岳関係者の発意により必要と認識され立ち上げられたのである。以下は設立趣旨書の抜粋である。

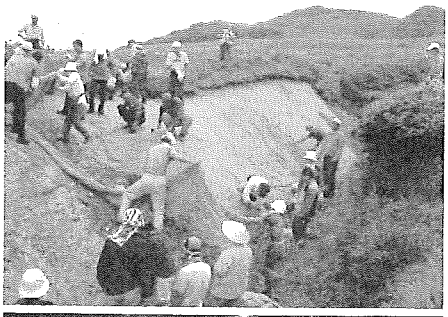
「この会の設立趣旨は、飯豊連峰を愛する人たち、飯豊連峰に関わる人たち、飯豊連峰に登る人たちの協働により、人為的な影響で荒廃した自然を復元させ、原始性の高い飯豊連峰の自然が永続的に維持されるように、その保全活動を推進することを目的とする。このため、飯豊連峰に関する様々な主体の保全活動が無秩序とならないよう、広範囲な関係者が様々な立場で連携・分担するための情報交換、意思疎通を行うこととする」

このような設立趣旨により、飯豊連峰の関係者が一緒になって山の保全に関わっていく連絡体制が動き始めた。そして同日の午後、飯豊連峰保全シンポジウムが開催され一〇〇名以上の一般・団体が集い、飯豊連峰について語り合い、情報発信を行った。

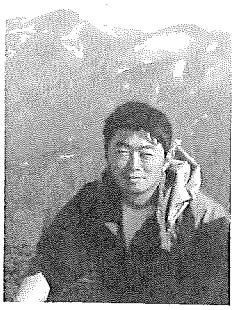
今後、飯豊連峰保全連絡会では、登山シーズンの前に関係者が集い、各々の保全作業の実施計画をとりまとめ、それら情報を関係者皆で共有し、登山シーズン後にも実施結果をとりまとめ次年度の計画を策定することとなった。またシーズン中には合同で取り組む保全活動も計画している。関係者が情報を共有し、一定の理解と手法のもと、個別にあるいは連携することとなり、さらに一般登山者への啓発や情報発信等を行うことも検討されている。また特に近年、思い入れのある山域の保全に関わりたいとする一般登山者も見受けられることもあり、ぜひ連携し、それら善意の行為が自己満足や無秩序とならないように連絡調整することとした。

関係者が一緒に取り組む体制は、昔ながらの山の管理そのものであり、特段新しいものではないのかもしれない。しかし今一度、本来の山への関わり方として再評価していくべきではないだろうか。

この飯豊連峰での取り組みはまさに動き出したばかりであり、不確定不確実な要素もある。しかしこの山域の特性に即した仕組みとして、各方面のご理解を得た。以後の取り組み内容を広く情報発信し、飯豊連峰のみならず日本の山の自然環境の保全につながる事例となるよう、引き続き取り組んでいきたい。



上・植生復元作業。上流の旧登山道の不安定な侵食面を緑化ネットで覆う。上流側から順に施工。関係者が一丸となって取り組んだ

下・飯豊連峰保全シンポジウム。山岳関係者、自然保護関係者、行政関係者など、39団体119名もの参加があった。

佐藤一交（さとう・いっこう）
1975年山形県庄内地方生まれ。1995年専修大学北海道短期大学造園林学科卒、環境庁入庁。九州、山陰、東北の国立公園の管理のほか、新宿御苑管理事務所に勤務。2006年より環境省羽黒自然保護官事務所に着任。羽黒自然保護官事務所には2008年2月に設立された飯豊連峰保全連絡会の事務局が置かれている。